

プロローグ

何年も生誕地を離れ 果てしない旅を続けた鮭は、その旅の終焉を迎えるため
激流を遡り、自分の「初点」に還る。

試練を乗り越えて目的地にたどり着く頃になると、まるで体内を流れる血が
燃えだしたかのように 身体は ^{くれない} 紅 に染まり、浅瀬の至る所でうごめく鮭の群れは、
離散集合を繰り返しながら、浅瀬で緋色の絨毯を形成する。

景観にそぐわないその赤い絨毯の中では、「生殖」の思いを遂げるべく、
オスはメスを追い、メスはオスを求めて、鋭角と円弧の入れ混じった曲線を
描きながら右往左往し始め、それに呼応するように、緋色の絨毯は大きさを変える。
その伸縮のテンポは、徐々に速度を増し、いつしかすさまじい快感と陶酔感の
混じり合った狂乱が頂点に達した時、緋色の絨毯は色あせていく。

それに伴って集合体は、その形を失い、オスは浅瀬の緩い流れに逆らう力をなくし、
メスは余力を産卵のために使い切る。

命が途絶え「もの」となった肉体はゆっくりと流れる川の水に流されて自然の
表舞台から消えていく。

そしてその後には、躍動を始めた「初点」がそれにとって代わる。

海

「一匹の」と言うよりは「一頭」と言った方がいいような 大きな亀が果てしない海原を泳いでいる。

この時期、生殖のために他の亀たちは東に向かって泳いでいるはずなのに、その亀はただひたすらに南に向かって進んだ。

休憩のつもりなのか 時折波にその身を委ね、ゆらゆらと海面で過ごした後、左右に首を振り、再び南下を続けた。

その単純な行動は何日も何日も続き、産卵を終えた亀達が 新しい周期を始めるために生活の場所に戻る頃のある日終わりを迎えた。

直進を止めた亀はその地点でゆっくりと何度か輪を描くように泳いだ後、甲羅に隠れた首を大きく伸ばしきり、胸いっぱい息を吸い込んで頭を下げ、そのまま傾斜をつけて沈んでいった。

しばらく前に東の水平線に顔を出した太陽が 深蒼色のうねりのある海面に輝きを与え、亀のヒレの動きに合わせてエメラルドの模様を描いていた。

周りに魚やクラゲの姿も見えず、深みを増していく蒼い水の中で鼓動だけが亀の頭の中で単調なリズムを繰り返していた。

前脚のヒレを一搔きするごとに水温は下がり、いつもは温かい水の中で自在に動く体の動きがが重くなり始めた。

さらに潜って行くと光はその力を失い、重圧に体中の皮膚が感覚を失い始めた時、何かの音が闇の中から聞こえてきた。

「null bi all, all bi null」

いやそれは声というより耳を通さず直接頭の中に繰り返される独り言のような響を持っていた。

その声が意識の世界から勝手に一人歩きを始め、その連続音が頭脳を満たし、暗い海の中で優雅な前脚のヒレが動くのを止めた瞬間、暗黒の世界から闇が消えた。

長崎県五島。

梅雨の前触れを告げるような曇り空が続いていた。
初めて自分でアイロンがけしたワイシャツの襟がすでに襟首に
こびりついている。

灰色の空に色あせたレンガ作りの教会が 今日はずっとより
大きくそびえていた。
時々聞こえてくるすすり泣きの声が 海から来る湿気にふれ、
さらに重苦しさを増していた。

ハルは立っていた。
右側には父さんが、そして左側には妹のアキが立っている。

「人は地から生まれ そして地に帰って行く。アーメン」

神父の声が儀式の終わりを伝え、それまで立ち尽くしていた人々が
準備された百合の花を一輪ずつ棺の上に供え、黙って立ち去っていく。

ハルはまだ拒んでいた。
母が自分を残して、あっけなく逝ってしまった事を。
意味の無い拒絶だったが 今はその強い拒絶心の力がハルを支えていた。
母はハルを愛し、ハルも母をそれ以上に愛した。
だから母が自分の前から何の前触れも無く永久に去って
しまったことが許せなかった。
そしてまた自分が このことをすでに事実として
認識し始めていることに、憎悪感をもった。
隣でただ泣いている妹を恨めしく思った。

母の死は、あっけないだけでなく、多くの人にとって
「疑問」だった。
「なぜ？」という一言が人々の口から必ず発せられた。
あの日、野生の花を探しに家を出た母が 海で漁師に発見されて
一度は息を吹き返したものの、そのまま亡くなった時、
謎は謎のまま残ってしまった。
母のたった一つの遺言のようなものは
「南の海で海葬して欲しい」

ということだった。

数少ない親戚以外の参列者が一人もいなくなり、ぽつんと残された棺を葬祭会社の瘦せた男達が霊柩車に乗せ走り出した。

その後を追うようにハル達も火葬場に向かった。

キリスト教徒だった母は、本当は教会の墓地に埋葬できたのだけれど、母のたつての希望で亡骸は火葬され、外海で海葬される事になっていた。

火葬場で棺のふたが開かれ、最後の別れを告げる時

母の好きだった百合の花を母の透き通るような白い頬の横に置いた。

「百合の花って花びらが大きくなると空っぽの所も大きくなって

そこに花びらを通して入ってくる光がとてもきれいな。だから本当は空っぽの百合の花が好きなのかもね」

母は時々、冗談みたいにそんなことを言って自分で笑っていた。

そんな母の顔が百合の花で隠れてしまい、棺のふたが閉められた時

ハルの目から急に涙があふれ出した。

「お母さん！」妹の泣き声がひときわ高くなった時、ハルも同じように母を呼んだ。

そして棺は暗い釜の中に吸い込まれていった。

南の海の底

気の遠くなるような昔のようであり、つい一昨日の出来事のようにもある、まだ記憶に輪郭の伴う意識が 徐々に亀の頭に戻ってきていた。いつの間にか再び力を得た前脚のヒレがゆっくりと上下運動を繰り返す、気がつくと亀は巨大な百合の花の形をした壺のようなものの周りを回っていた。その壺のようなものは、一つではなく、亀の視界に不規則に並んでぼつんぼつんと闇に視界が溶け込んでしまうまで続いて立っている。その中でも亀の描く円弧の中の壺は、ひととき大きい存在のように亀には見えた。

無意識で描く円弧の円周が小さくなり、壺の上端に尖った口先が触れた瞬間、亀の体は花卉のようなものに包まれた壺の内部に吸い込まれてしまった。一瞬逃れようともがいたが、次の瞬間逃れることに抵抗を覚えた。それは、まるで胎児が母体の仲にいる状態に似ているのかもしれない。もっとも亀には母体というものは存在せず、それは孵化する前の卵の中の状態と言えるかもしれないが…いずれにせよ 逃れる必要のない安心感に包まれた、心地よさに亀はヒレや首を甲羅から伸ばしきって目を閉じた。

不思議なことにヒレを伸ばしたら触れてしまうはずの花弁に触れる感触はなく、それよりも不思議なのは肺の中の空気は 使い切ってしまうはずなのに、そこでは自由に呼吸する事ができた。

「ここは、Sponjin の中。Sponjinの穴の中。」

「穴は有であり、穴は無でもある。」

亀の頭にいつかの「耳を通さず直接頭の中に繰り返される独り言」が再び聞こえてきた。そしてその声は、暗い海の底で亀をその中に抱きながらとまること無く続いた。。

海葬の日

夏休みが来週始まると言う 二学期最後の土曜日。
今日は母の願いを叶えるために、遺骨を南の方の海で海葬することになっている。
一週間以上母の遺骨は、白い磁器の壺に入れられ 居間の棚の上の額に入った母の笑顔の横で冷たく鈍い輝きを放っていた。
最初の内はそこに目が行くと、ハルの心は乱れ、食卓での寡黙な会話に相づちを打つことさえ苦痛だったが、二三日前から「そこ」に向かった視線がそこにとどまることが無くなり、「そこ」は 居間の自然な一角になりつつあった。

「船の準備ができたぞー」

父が玄関の戸を開けるなりそう叫んだ。ハルは母の遺骨を持ち上げ大事そうに両腕の中にそのツボを納めた。

「あき、行くぞー」

ハルが呼ぶとアキは真っ赤なビニール製の防水コートを来てニコニコして飛んできた。

「馬鹿、真夏に防水コートか？」

「うん、これお母さんが買うてくれたもん」

そう言われてハルは、二の句が継げなかった。
妹に 今、自分たちが何をしようとしているのか思い知らされたような気がした。

港までそれほどの距離では無いけれど、タクシーが家の前でエンジンをかけて待っていた。

「おまえ達は後ろに乗り」

そう言われてハルとあきは 後部座席に滑り込んだ。
車が動き出し砂利道に入った時、壺の中で何かの音がした。
それはまるで何かが砕けるような音であり、誰かがのどの奥で痰を絡ませるような声にも聞こえた。
反射的に後ろを振り返り、ガラス越しに家の方を見ると、曇り空の隙間から放射線状の光の筋が家を照らし出していた。
その時ハルはふと、家を見るのはこれが最後になるかもしれないと思った。

Sponjin

亀は本能的な感覚に意識が芽生えつつあるのを感じていた。
それは以前のように経験が作用する自発的、突発的なものでは無く
普遍的なシステムの中で明確な方向性を持ったある種の「力」だった。
その「力」が頭の中でさらに力を生み出し、本能的な感覚さえもが
その力に意識として組み込まれていくのを感じた。

彼が考えたことは、狭い範囲だったが起こったし、逆に起こることは
当然のことのように事前に知ることができるような気がした。
いやそれ以上に、彼が望んだことが不思議なことにその通りに起こる
ような気がし始めていた。
まだ、それは明確な意識というか形を持っていなかったが
その不明確な状態で Sponjin と名乗る生き物の声に対して
いつの間にか彼も語りかけることが出来るようになってきていた。

それまで「言葉」と言う観念で亀の頭に存在しなかった「言葉」が
今は Sponjin との会話の手段として機能していた。

「ik bi Sponjin Tuk bi Kamyé (私は Sponjin お前は Kamyé)」という
音のつながりが言葉として認識された時、Kamyé の耳と脳は
言葉を理解する機能を持ち始めた。

そして Kamyé が「ik bi Kamyé tuk bi Sponjin」とつぶやいた時
Sponjin の体内にいる Kamyé に なんととも言えぬ心地よさがあふれ
それが Sponjin の喜びの気持ちを表していることが分かった。

その段階から Kamyé は、スポンジが水を吸収するように Sponjin の
言葉を理解していった。

彼らの対話は光の当たることのない深海で何ヶ月、いや何年も
続けられていった。そしてそこから時折あぶくが連なって海上に
上っていく光景は、ある日終わりを告げた。

Sponjin の体から一回り大きくなって吐き出された亀の顔には
以前に認められなかった深いしわが刻まれていた。
そして甲羅の間から手足を思いっきり伸ばし首をきゅっと上に曲げると
ゆらゆらと手足を交互させながらゆっくりと浮上し始めた。
その口からあぶくとともに「null bi all, all bi null」
と言う言葉が繰り返されていた。

海葬

波止場の右端にその船は繋がれていた。

「おー、来たねー 待ったったバイ」

古賀さんが体に似合わない高い声で叫んだ。

三人は呼応するように タクシーを降りて、足早に船に向かった。

注意深く歩くハルの胸に抱かれた壺からは、もう先ほどの音は聞こえてこなかった。

船は中型の漁船で、丁度真ん中に大人二人が座れるキャビンがあり、板張りの細い通路に挟まれていた。

三人が乗船すると古賀さんはエンジンをかけ、父に指図してとも綱を外させた。

「ポンポンポン」という音を立てて船は後進し、向きを変えた後そのリズムのテンポを速めて滑らかな音が続くようになると船首が砕く波の粒が、外に立ち立つ子供達に降りかかるようになりそのたびにアキは叫声を上げた。

進路は南。どこという明確な目的地はないが、3時間ほど走った所で遺灰を海にまき帰途につくことになっていた。

お昼をだいぶ過ぎた頃、「この辺で良かる」と古賀さんが言ってエンジンを止めた。周りは空と海だけ。

こんな寂しい所に母の遺骨をまくのかと思うと、ハルはちょっと悲しくなったが、それが母の願いだったことを自分に言い聞かせ、父と二人で壺のふたを開け、三人で代わる代わる壺の中の遺灰を舐先越しにふりまいた。波の上を走る湿った空気が思ったよりも広い範囲に灰を運んで、海面を滑るように舞いながら「母さんだった灰が」視界から消え去っていった。

三人が遺灰を巻き終わると古賀さんは、船の冷蔵庫から弁当を取り出してみんなに配った。いなりに巻き寿司それに刺身が振る舞われた。空腹だけのせいではないのだけど沈黙がちだった三人は、寿司に温かいお茶を飲んで少し気持ちが軽くなったような気がしていた。

「母さんはもういない」と言うことが当たり前になってしまい、今は「母さんの最後の願いを叶えた」という満足感だけが心の大半を占めていた。それはハルだけでなく三人もそれから仕事を終えた古賀さんも同じだった。食事が終わると、最後に三人で大声で「さようなら」と叫んで、別れを告げた。その時ハルには、一つの時代が終わったと言う安堵感より、新しい何かが始まるという時の不安感が芽生えた。船は方向を変え、北に向け走り出した。

夕暮れの港を黒い船が滑るように外海に向かって出港した。

見送りの姿もなく出港の汽笛も鳴らさず。

しばらく走り続けたその船は、夕焼けに染まった空の下、

黒いシルエットを細めつつ波の中に沈んでいった。

気味の悪いくらい静かに。

ナチスドイツはポーランドを併合したあと、欧州諸国を制覇。

その勢いでロシアに向け進出を開始したのは良いが、

ロシアを侵攻したのが裏目に出て戦況は一転していた。

同盟国日も、太平洋に戦線を拡大してから、やはり巨大な

戦域の維持に支障を来して、崩壊への道を進み始めていた。

そんな中、まだ認識のない絶望的な未来への期待に向けて開かれた

同盟国日本とドイツの細い架け橋がインド洋から喜望峰を経て

欧州に至る潜水艦での輸送作戦だった。

日本での任務を終えた Otto Baier は、小さな男達が

動き回る中で 一人自分の思いにふけていた。

ミュンヘンに残してきた妻の Eva や息子の Hans。

40にして初めてできた息子。可愛くて当然だ。

もうすぐ会えると思いが、窮屈な船内や煩わしい小男達の

動きさえも、笑みを浮かべて眺めるゆとりを与えていた。

Otto がもたらした測定装置が、どれだけ日本軍の救いになるか

非常に疑問だったが、そんなことはどうでも良かった。

疑問と言えば、「指導者への信頼性に対する疑問」の方が

彼にとっては、遙かに重大だったが、それさえも今は、帰国後の

プランの重要性の前にかすんでいた。

日本で買った真珠のネックレスを見せた時のエヴァの驚く顔が

早く見たかった。

「やはりベルリンに呼び寄せよう。」

そう独り言を言いながら立ち上がろうとした時

Otto は、艦内がざわついているのに気づいた。

夕食前のノンビリとしたざわつきではなく、無秩序で緊張感を

伴ったもので、Otto に 何が起きているのか尋ねることを

ためらわせた。。

一分もたたないうちにその喧噪さに秩序が戻り、そして百人あまりの乗組員が一斉に動きを止め口をつぐんだ。

その静寂が不気味で、Otto の額に新たに汗が流れ出た。

「発見されたのだろうか？」

そんな思いが駆け巡った。

「撃て-！」

突然、司令塔の方からそんな声が出て、再び沈黙が艦内を満たした。

それが何分くらいだったか、Otto には 思い出すことが出来ないがただ、今はおおよその状況がつかめていた。

静寂を破る「ウォー！」と言う歓声が起こり、それが渦を巻くように艦内に連鎖していった。

Otto の緊張が解け自然に両手をたたいていた。

本来ならこの航海は特別任務で、敵艦の攻撃は、目的に入っていないはずだったが、何らかの理由で敵艦攻撃と言うことになったのだろう。

船首が上を向き、敵艦の被害状況を確認するために浮上の体制に入った。

一瞬、「外の空気が吸える。」そう思った。

そして伊七号は、停船した。

兵士達が次々と甲板に出て行き、その後を追うように Otto も、最後の一人として甲板の上に立った。

目の前に 完全に消失する前の夕陽が作り出す、赤と群青のグラデーションが飛び込んできた。。

大方の兵士達は艦首の方に固まっていて、そちらの方ではどうやら

捕虜の尋問をしているらしく、甲高い日本語と苦痛の叫びが

Otto の耳に、波の音と一緒に聞こえてきた。

その状況に不快感を覚えた彼は、船尾の方に向かった。

そしてちょっと離れて一人になった所で立ち止まり、振り返った。

1 キロほど離れた所で中型の商船が沈没しかけているのがまず目に入った。

細い月の光が描き出すシルエットの中でオレンジ色の炎が黒い煙を伴ってチロチロと動いていた。

Otto は、美しいと思った。

久しぶりの大海原。藍色の深い空に弓月の細い光。

何よりもこの新鮮な空気。
彼は、三度深呼吸を繰り返し目を閉じた。

「パンパン」

と言う音に Otto は、慌てて目を開け身構えした。
それに続いて機関銃の連続音が聞こえ、近くで漂流していたボートや
両手を挙げて助けを乞う船員の周囲で水しぶきがあがった。

Otto は、呆然とした。

「Aufhören! (やめろ)」

彼がそう叫んでも日本兵には、言葉が通じるわけもなく、殺戮は続いた。
耐えきれなくなって彼が一番近くにいた兵士から銃を奪おうとした時、
上空に二機の戦闘機が飛来して来て、上空を旋回したと思ったら、並んで
低空飛行に移り潜水艦に向けて掃射を開始した。

日本兵は、一目散に司令塔に駆け上がり、信じられない早さで甲板から
姿を消した。

Otto も 後に続こうとした時、うずくまった金髪の青年が目にとまった。
彼は一瞬戸惑ったが、足はその青年の方に向いていた。
刺し傷だらけのその体からは、生存の印は認められず、ただ薄く開いた
その奥にエメラルドの瞳がちらっと輝いたように思えた。

伊七号は、Otto を甲板に残したまま潜水を始めた。
上空では二機の飛行機が態勢を整えようと大きく旋回して戻ってくる。
Otto は、意を決して腕の中の青年の頬に口づけをすると、乗る人もなく
漂っている救命ボートの方に向かって飛び込んだ。

嵐

船は順調に走っていた。

まだ灰色の空は、灰色のままだったが少しずつ藍色の深さを加えていた。

「そろそろ島が見えてくるな？」とハルはふと思って前方を注視した。

そんな思いが通じるわけではないのだが、しばらくして「おかしかねー」と古賀さんがつぶやいた。

スピードを上げたはずなのに、位置が殆ど変わらない。

むしろ、北に向かっているはずがGPSの位置は、少しずつ南に下がっている。

そんなことを独り言のように言っている古賀さんの声を耳にしながら

三人は、床の上に座ってそれぞれの思いにふけていたが、

さすがにしばらくすると父さんが立ち上がり、古賀さんの方に向かいながら、

「大丈夫ですか？」と大きな声で訪ねた。

「んーっ、こんかこつは初めてですたい。よっぽど海流の早かつでしょ」

と、不安を隠しながら古賀さんは答える。

そのこわばった笑顔に隠れる不安な思いが伝わって、ハルは一瞬気持ちを古賀さんの方に向けた。

そんな気持ちが伝わったのか、古賀さんはそれからは独り言を言うこともなくなり、夢中で舵を取った。

父さんはその横に立ち、気遣うようにしながらも黙って前方を見つめていた。

北の方からはその海流を追いたてるように、湿った風が吹きだしていた。

「しもたー」

突然古賀さんが叫んだ。

「燃料のもたん！」そういう古賀さんの手が震えだしていた。

そして、それを真似をするように船自体が大きく揺れだした。

北からの風は、いつしか雨を叩きつけ、海水の塊はしぶきを上げ巨大なうねりを加えながら近づいては消える。

そのたびに船は、持ち上げられ落とされて、キャビンの中に

塊になった四人は、立っていることさえ困難になった。

最初は、すすり泣きだったアキが大声で泣き出していた。

ハルも泣き出したかったが、妹の泣き声を聞いてこらえていた。

「とにかく、燃料の持つ限り風上に向けて舵をとる。」

そう自分に言い聞かせるように古賀さんが声を上げた。

そのとたん古賀さんの体が宙に浮いた。

いや、船全体が宙に浮いていた。

そして次の瞬間船体は、突き落とされ、またすぐ持ち上げられた。
その動きで、古賀さんの頭がキャビンの天井に激しくぶつかった。
「グキッ！」 そんな音がしたかと思ったら、古賀さんの体は床に
倒れ込んだ。

それは一瞬の出来事で、次の瞬間に三人は呆然と床に横たわる
古賀さんの体を見つめていた。

その目は開いていたが、口から言葉が出ることはなかった。
父さんは、すぐに状況を悟って、自分が操舵することにした。
そのために邪魔になる古賀さんの体をキャビンの外に出そうと
引きずって一瞬キャビンの外に出た。

そして思いっきりその体をキャビンの外に引っ張った時
大きな波が船にぶち当たり、「あっ」という声がしたと思った瞬間
父さんの体がハルの視界から消えた。

絶望という言葉が急にハルの頭に浮かんだ。

いやそれは言葉ではなく、初めて体験する「絶望」そのものだった。
それを感じた時ハルの体から力が失せ、目の前が真っ白になった。
そして泣き叫ぶアキを抱きかかえるようにして、その場に倒れ込んだ。

アキはあの時のことを後になって時々夢に見る。
それは記憶と言うにはあまりに脆いフラグメントの連続で構成された走馬燈に似ていて、「…のようなもの」が次から次へ夢の場面を占めその場面にいるはずもない母の姿や友達のゆきちゃんがはっきりした姿で出ることもあった。

だからそれは、事実で構成される叙事詩と思って聞いてはいけないのだろうが、彼女の口から出る言葉は、不思議に現実感を伴っていて、語っている本人よりその話を聞くものの方がむしろその場に居合わせたような気になる時があった。もともとアキの夢の話に耳を傾ける者の数はたかがしれているのだが…ハルが最初にその話を聞いたのは、ここでの生活が始まってしばらくしてからのことだった。

嵐で絶望の境地に立たされ、気を失って、それから…
気がついたら嵐も、船も、闇の恐ろしさも、強い太陽の光にかき消されて丸っこい玉石の浜に仰向けに寝ていて、アキの両目が心配そうにのぞき込んでいた。
どういわけかその隣に別の二つの目があって、ハルと目が会うと目尻が下がり「tuk vi, tuk vi」と声をだした。
そして次の瞬間、どういわけか顔をしかめてその浜のすぐ裏手のヤブの中に消えた。

「だ、誰だ 今のは！」
無力感が一気に吹き飛び、ハルはアキの腕をつかんだ。
それがハルのここでの第一声だった。
「知らない。」と返事をしながら「でも、ほら」と
浜に積まれた果物や得体の知れない食べ物、それに筒に入った水を指さして、
「あの人が持ってきてくれた。」

訳が分からなかったが、ハルの記憶は少しずつ形態を整え、自分が気を失うまでの経緯は明確になった。
ただそれからが空白だ。

「ここはどこだ？」「？」
「いつからここにいる？」「？」
「あれは誰だ？」「それはもう聞いた。」「あ、そうか」
何を聞いても アキから納得のいく返事は貰えそうになかった。

そしてそこで会話は途切れ、今度はゆっくりと周りを見回した。

透明な水、波は穏やかで エメラルドの水の中を光の筋がキラキラと輝きながら泳いでいる。

座っていると見えない魚が、立ってみるとその間を速度を変えながら動いている。

すぐ後ろは やぶのような、あるいはジャングルのような木立でその向こうには、大きな木が何本も続いている。

左の方には、大きな岩場がこの浜を囲むようにそびえ、その右手には、…

「あれっ、あれが船？」

そこには、見慣れた船が半分波間に見え隠れしていた。

アキは、急に悲しそうな顔になり

「うん」と短く答えた。

その船の残骸を見て、ハルの脳裏に鮮明に「あの場面」がよみがえった。

「父さんが死んだ！」

死んだ姿を見たわけではなかったが、父さんの死は間違いなかった。

忘れていた涙がこみ上げてきた。

「うっ、うっ」喉の奥がしめつけられ、堰を切らしたようにうめき声のようなハルの嗚咽が浜に響き渡った。

「にいちゃーん」アキも泣き始めた。

激しい鳴き声は、太陽が天頂に達するまで続いた。

そんな二人の泣き声を、この島の住民の全てがじっと聞いていた。

もうこの世に父さんも母さんもいない。

それは、冷酷な宣告だった。

ただ、ハルは一人ではなかった。

妹のアキがまだそばにいる。

そして…

「あれは一体誰だったんだ？」

ハルの頭の中で疑問が反復され、同時に新しい何かが芽生えた。

